

朗読者 作品紹介

高橋頼雄

雄勝硯生産販売協同組合勤務。4回目の参加となる今回は、吉野弘が姪夫婦に書き送った詩「祝婚歌」と、茨木のり子の詩「自分の感受性くらい」の二作品を朗読。人生で一度は聞きたい詩二作、行間にかいま見える空気感もぜひお楽しみください。

神山斉子

初年度より朗読者として参加し、毎年、史実を背景として綴られた貴重な作品を朗読し、聴衆に強い印象を残している。今回は、第二次世界大戦中、徴傭船の乗組員として太平洋の哨戒にあたった、ある雄勝の青年にスポットを当て、その回想録を朗読する。

※徴傭船

戦時中の国家総動員法に基づいた国民徴用令(昭和14年7月施行)により、軍に徴傭され駆り出された船。豪華客船や大型貨物に加え民間の漁船も徴傭され、雄勝町からも多く漁船が戦地へと駆り出された。

大和恵士郎

元気な小学一年生。朗読会には初めての参加となる。朗読するのは、童謡「ぞうさん」「一年生になったら」などで知られ、多くの詩を書き残した、まどみちおの作品から「どうしていつも」と他一作品。純真無垢な朗読に注目したい。

二階堂恵子

雄勝町名振出身、仙台在住。子供たちへの読み聞かせの経験をもつ。ひとつひとつの言葉が紡がれるような温かい語り口は、多くの人を物語の世界に引き込んでいく。今回は、100年前に発表された芥川龍之介の児童文学作品を朗読する。



©Hiroaki Kajita

特別ゲスト プロフィール

大日琳太郎(だいにち りんたろう)氏

宮城県仙台市出身。20年にわたり東京で俳優として活躍し、能や義太夫も学びながら多くの舞台作品を上演し、テレビやCMにも出演した。Don Kenny(ダン・ケニー)氏、小川七郎氏と共に英語狂言も度々演じている。2009年12月より郷里の仙台に拠点を移し、2011年の東日本大震災を機に「ふるさとの物語制作委員会」を設立、郷土を題材にした作品や復興を祈念する作品を毎年制作している。今年は、明治維新150年を記念し、西南戦争の国事犯として宮城刑務所雄勝分館に移送にされた4人の男にスポットライトを当て、雄勝を舞台に男たちの喜びや悲しみを描いた大作を制作し、全国4箇所での公演をひかえている。また、朗読や一人芝居も得意とし、小泉八雲、泉鏡花、真山青果、近松門左衛門らの作品において聞かせる日本語の美しさは他の追随を許さない。特に東北弁で朗読する斎藤隆介作「八郎」は大日氏の十八番とも言えるものであり、2014年3月11日にNHKのラジオ深夜便にて日本全国に放送され、2013年9月には韓国で披露し大絶賛を浴びた。この朗読会では、各所で注目を浴びる「八郎」に加え雄勝の民話が披露される。「八郎」は秋田に伝わる民話で、大津波から人々を守った勇気と感動にあふれた壮大な話である。海を越えて多くの人を魅了する大日氏から語られる「ことば」にも注目したい。